

---

# バカと先輩と召喚獣

主人公を引き立たせるのは脇役！

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと先輩と召喚獣

### 【Nコード】

N1574Y

### 【作者名】

主人公を引き立たせるのは脇役！

### 【あらすじ】

これはバカとテストと召喚獣の外伝の世界です。 明久たち二年生の物語ではなく、ある三年生の日常の物語です。 明久たち主人公達は、多分ほとんど出ません。 それでもいい方だけ読んでください。

## プロローグ（前書き）

短編から連載になりました。完結目指して頑張ります。応援や感想をよろしくお願いします。

## プロローグ

これはバカとテストと召喚獣の外伝です。明久たち二年生の物語ではなく、ある青年達の三年生の物語です。

浜『ふうわ〜今日も学校か。』

おはよう。俺の名前は、夢想 浜也だよろしくな。え、名字が変じゃないか？

それは俺の親に言ってくれ。俺の親は、この名字を決めた理由は、なんか格好いいからだそうだ。

ふざけんな！！そんな理由で名字を決めんな！！この名字のせいで俺がどれだけ人から苛められたと思っただやがる！！

と八つ当たりしても意味ないか。はあ〜

と、まだ説明終わってなかった俺は、Fクラス代表だ。

まあ、威張れるほど偉くは、無いけど。

最低クラスの代表たぜ。苦勞もかなりあるんだよ。

清涼祭であいつらを纏めるのに苦勞もしたし、最近、一部の奴らがFFF団に入ろうとするやつは、いるわでスゲー忙しい。

最低クラスの代表になんてなるんじゃないかった。

宗「お〜い、恋姫」

誰だ！？エロゲーのタイトルを俺の名前で呼ぶやつは！！

宗「おい、聞いてるのか恋ひ、ガハッ」

とりあえず宗平を一発殴つといた

で、こいつは、秋葉 宗平だ。

一言で言うなら、悪友だ。

こいつは、どんな手を使つても人の幸せを壊そうとする屑だ。ただ、こいつの情報収集能力は、ずば抜けて高い。

一応、頼りになる奴だ。

宗「いきなり何すんだ。恋○夢想」

浜「お前は、まずその呼び方をやめろ。」

何だよ。あだ名がエロゲーのタイトルっておかしいだろ！？

宗「じゃあ、他にどう呼べばいいんだ！！」

浜「普通に名前で呼べ！！」

宗「あ、そうか」

浜「あ、そうか じゃあねえ！！普通真つ先に名前か名字だろ！！」

なんでこいつは、人を名前や名字じゃなくて、エロゲーのタイトルで呼ぶ！？

とそんな雑談をしてると、もう学校に着いた。

そして、俺達のクラスに向かうとその先には

宗「何時見ても、廃屋だな。」

浜「ああ、そうだな。」

まるで、遭難者の気分だ。

そして、入るとそこには……………

リ「やあやあ、浜ちゃんに宗ちゃん。今日は早かったね。」

金髪碧眼の美少女が笑顔で出迎えてくれた。

宗「リンちゃん。今日も凄く可愛いぜ。」

リ「宗ちゃんは、相変わらず褒めるの上手だね。」

リン・フォールフィールド

スタイル抜群の外人。何故か一年前ぐらいに日本に来たのに日本語が上手い。

クラスの唯一の癒し。

リ「浜ちゃん、浜ちゃん」

浜「ん、何か用か？リン」

リ「浜ちゃんは、何かないのかな？」

浜『何か？ん、ああ、わかった。』

リ「おお、で正解は？」

浜『リン、おはよう。』

リ「うんうん、朝の挨拶は、大切だよー浜ちゃん」

リンは、笑顔で俺に言ってきた。

可愛い！！反則だ。この笑顔。

と三人で話している。

綾「えっと、おはようございます。リンさん、秋葉さん、代表」

と、中緑 綾子が話しかけてきた。

中緑は、一言で言うと和服が似合う大和撫子である。  
可愛いと言うより綺麗の方が似合う。

宗「中緑さん、おはようございます！！」

リ「おっはよー、綾ちゃん」

浜『おはよう、中緑さん。』

綾「皆さん、今日は、早いですね。」

浜『今日は、偶然早かっただけ。』

リ「そうだよ。でも、宗ちゃんが早いのっておかしいよね。」

浜『そうだな。』

宗「どういう意味だ。恋 夢想」

浜『だから、その名で呼ぶな!!』

リ「また、始まったね。浜ちゃんと宗ちゃんの漫才。」

綾「でも何時も見ているから馴れましたね。」

リ「まあ、そうなんだけどね。」

と雑談をしていると、チャイムがなった。

宗「チツ、チャイムに救われたな。浜也」

浜『何様だお前は!!』

綾「代表に秋葉君。そろそろ先生も来ると思っから、席に座る。」

と二人は、綾子になだめられ、席に着いた。

そして、先生が来て何時もと同じように時間が進むと思っていた。



そうこの後の朝のホームルームまでは……

第1問「鉄人への復讐の誓い」(前書き)

長く書けない。

## 第1問「鉄人への復讐の誓い」

先生が障子を開けて入ってきた。

俺達は、何故か驚いていた。

別に先生が入ってきた事じゃ、ない。

皆知ってるかい？

文月学園には鬼の補習室があるのを。

そこには、人間という存在を遥かに凌駕した生物がいるのを。

何故こんな話をしたのか？関係無いだろ。

いや関係ある。

そう開けて入ってきたのは

鬼の補習室を担当し今は、2年F組を担当している。西村 宗一。  
本人が俺達の前にいた。

多分ほとんどのクラスメイトは、思っているだろう。

浜・宗・F組「……………」何故鉄人が俺達のクラスに来てるんだ！？……………」

今、中緑とリンを抜いた、F組総勢45人の心が一つになった。

西「では、朝のホームルームを始める！！」

鉄人の声がクラス全体に響き渡った。

浜『なんで鉄人がここにいますか？』

西「夢想。西村先生と呼べ！！いや、実は、うちのクラスは、ほとんど停学中でいないんだ。何安心しろ。残ったうちのクラスの生徒は、Eクラスと一緒に勉強させてもらっている。」

浜『その事と今、西村先生がここにすることが関係あるんですか？』

西「ああ、ある。2年の問題児は、いなくとも三年の問題児は、いるからな。」

浜『はあ、解りました。』

くそ、何時も問題を起こしてるから何も言えない。  
具体的にはどんな事してるのか？  
主に鉄人への奇襲。後は、2年の後輩と協力して没収された物を取り返そうと思ったりしたぐらいだ。

西「解ってくれたならそれでいい。では、お前ら！！鞆を自分の机の上に中身が見えるように開け！！！」

浜・宗・F『なっ！？』

何だと！？鉄人の荷物検査だと！！ヤバイ今日は昨日発売されたゲームをやるうと思っけて持ってきたのに。

鉄人めエ！！こんな時に荷物検査だと！！どうすればいいだ。

2年の後輩に協力すれば取り返す事が出来るのにあいつら覗きして停学なってるからそれは出来ない。

仕方ない！！こうなれば、実力行使だ！！！！

くたばれ鉄人！！お前に明日があると思っな！！  
他の奴らも同じ考えだったらしい。

皆一斉に鉄人に向かっていった。

西「ほほう……。キサマら、良い度胸だな」

浜・宗・F『鉄人今日こそ、くたばれエエエエエエエエ！！』

そこで、俺達は、皆一斉に意識が途絶えた。

何故かそこで、現代にはあまり見ない綺麗な川を見てきた。死んだお爺ちゃんと会った。

俺は、急いで来た方向へ引き返した。

あそこにいちゃいけない。

俺は、本能でそれを悟り、その後、俺は自分の本能を信じて良かったと思った。それは悪霊と化したじいちゃんが物凄い勢いで俺を追って来たからだ。

無茶苦茶怖かった。

それがトラウマとなり、それ以来、じいちゃんの写真を見ることが出来なくなつた。

てか、学校でこんな死の淵まで逝くのって可笑しくない！？  
学校もトラウマになりかけた。

恐るべし。西村宗一。

余談だが、その後普通に荷物検査は、行われ、俺は、ゲームを没収された。

最も中緑とリン以外気絶したいたので鉄人勝手に荷物物色されたらしい。

鉄人めエこれで終わったと思うなよ。

俺達は、2年以上に諦めが悪いからな。

俺達は、怨敵に復讐する誓いをここに立てた。

第2問「敗北者の末路」(前書き)

長くならない。

## 第2問「敗北者の末路」

宗「くそ、お前の言うことなんて聞くんじゃないかった。」

浜「何だと?」

宗「お前が俺達をそのかしたせいで俺達は、こんな所にいるんじゃないか。」

浜「黙れ!!お前らだってノリノリだったくせに。」

宗「それはお前があんなに自信満々に言うからだろう。」

浜「お前だって、あの作戦でならいけるって言っただろう。」

宗「てか、そもそもお前があんなこと思い付かなきゃこんな事にならなかったんだ。」

浜「てめえ!!!いい加減にしろよ!!!」

宗「それはこっちの台詞だ!!!」

西「お前ら!!!いい加減に」

浜・宗「うるせんだよ!!!喋るゴリラ!!!……………て、あ!!!」

西「ほう…:夢想到秋葉。良い度胸じゃないか。」

浜「すいません。西村先生でも悪いのは、この馬鹿です!!!」



宗「違います。西村先生。悪いのはこの大馬鹿です!!」

西「お前らの言いたいことが良く分かった。」

浜・宗「分かってくれましたか。西村先生」

西「ああ、お前らが観察処分者に匹敵する馬鹿だということが分かった!!」

ガシツ!! x2

めきユツ!! x2

浜・宗「へ?つてあががががが!?!」

西「ただ、先生も鬼じゃない。あと課題を30ほど増やす程度で許してやるっ」

浜・宗「いやアアアアア!!」

F1「あいつらも馬鹿だな。」

F2「ああ、大人しくゴリラの言うことを聞いてれば良いものを。」

F3「全くだ。無駄なことをするからゴリラが調子に乗るんだ。」

西「お前らにも課題を平等に分けてやる。」

F1・2・3「いやアアアアア!!」

くそ、この屈辱どうしてくれよう。

そもそもどうしてこうなった。

1時間前

Fクラス

宗「どうするだ。」

浜「まず班を3つに分けよう。」

F1「なんで班を分けるんだ？」

浜「まず、一つの班が鉄人を足止めする。」

F2「確かにそれは重要だ。」

浜「そして、一つの班が鉄人を足止めしてる間二つの班が職員室と補習室に行く。」

F3「待て、職員室は分かるとしても、なんでわざわざ自分から鬼の補習室へ逝かなくちゃいけないんだ。」

浜「まあ、落ち着け。補習室に行くわけは、そもそも没収品が必ずしも職員室に置いてる訳じゃない。職員室に置いてなかったら他に鉄人が没収品を置きそうな所は」

宗「そうか、鉄人の根城の補習室!！」

F4「おお!！そうか!！」

浜「よし、班を3つに分けて作戦開始だ。」

浜「俺達の宝を取り戻すぞオオオオ!!」

F「おオオオオオオ!!」

（現在）

浜「で作戦は失敗した訳か。」

てか、いくら班を分けて戦力が落ちたとはいえまさか足止めが10分も持たないとは。

鉄人は、本当に俺達と同じ人間かな

宗「てか、浜也。」

浜「何だ？」

宗「二年の観察処分者の吉井明久は、鉄人を倒したんだよな。」

浜「ああ、多分な。てか、お前の方が詳しいんじゃないか？」

宗「まあな。てか、吉井明久は、どうやって鉄人を倒したんだろうな。」

浜「そりゃ召喚獣じゃ、て……ああ!!」

宗「うお、急にどうした。」

吉井明久は、多分試験召喚獣を使って鉄人を倒したんだ。確か観察処分者は、物理干渉が可能のはず。

俺は、多分そろそろ観察処分者になっても可笑しくないはず。  
とりあえず、試験召喚獣の操作を練習しなきゃな。それにそろそろあの設備は、いやだし。  
召喚獣の操作の練習が出来て、なおかつ設備の交換が出来る試験召喚戦争  
そろそろやってみるか。

浜『宗平。今決心した。』

宗「何を？」

浜『俺達Fクラスは、明日Dクラスに試験召喚戦争を仕掛ける。』

宗「はああアアアア！！」

明日が待ち遠しい。

第1夢「まいたけ政権!」(前書き)

短いですが番外編です。

え、サブタイトルがおかしい。

何もおかしいところは、一つも無い。

## 第1夢「まいたけ政権！」

Fクラス

浜「俺達は、まず、Dクラスに試験召喚戦争を仕掛ける。」

リ「浜ちゃん。質問いらい」

浜「何だ？リン」

リ「試験召喚戦争をするのは賛成だよ。でも試験召喚戦争をやる目的は？」

F1「リンさんの言う通りだ。俺達にはやる目的が無い」

浜「目的ならある。」

浜「その目的は……………」

宗「目的は？」

浜「まいたけ政権を作る事だアア！！！」

リ・宗・F「はあ？」

綾「すみません。代表。」

浜「何だ？中緑」

綾「まいたけ政権とは一体何ですか？」

宗「中緑さんの言う通りだ。まいたけ政権って一体どんな政権だ？」

浜「お前らまいたけ政権を知らないのか？」

リ「そもそもそんな政権があるなんて初めて聞いたよ〜浜ちゃん。」

浜「良いだろう。まいたけ政権について教えてやろう!〜!」

浜「まいたけ政権とは……………」

リ・宗・F・綾《まいたけ政権とは…………》

浜「何だっけ？」

リ・F・宗・綾《え!?!》

浜「まあ、いいか」

F・宗《いいわけあるかアアアアアアアア!〜!》

という夢を見てしまった。

試験召喚戦争前の朝から力が抜けてしまった。

やる気が根こそぎ夢に奪い取られた。

今日は、もう無理お休み。

この後、ギリギリ学校には間に合った。



第3問「戦争を起こす者達」(前書き)

浜『この小説の主人公誰？』

明桜 幽

浜『違うだろう！！俺だろ！！』

もう明桜が主人公で良くない？

浜『俺は、認めんぞ！！』

『

### 第3問「戦争を起こす者達」

前回のあらすじ。

浜『俺達Fクラスは、Dクラスに試験召喚戦争を仕掛ける。』

あらすじ終了

Fクラス

浜『え〜今日はお前らに重大発表がある。』

宗「浜也、お前！！正気か！！」

浜『ああ、昨日、言ったことを実行する。』

F1「夢想。重大な発表って何だ？」

リ「そうだよ。焦らさないで早く教えてよ。浜ちゃん」

浜『ああ、では言わして貰う。俺達Fクラスは、Dクラスに試験召喚戦争を仕掛ける！！』

F1・2・3『はああああああああああ！！？』

宗「言っちゃったよ。あいつ。」

リ「浜ちゃん。本気！？」

綾「代表。本気何ですか？」

浜「ああ、本気の本気だ。ということだ宗平。」

宗「何だ？」

浜「宣戦布告に行つてこい。」

宗「何でだよ！！」

浜「いいから行つてこい。」

宗「だから、何でだよ？宣戦布告に行つたらDクラス奴らにリンチに合うだろうが！！」

浜「代表命令だ。逝つてこい。」

宗「ち、ちつくしよオオオオオオ！！」

悲痛な叫び声をあげながら宗平は、Dクラスの方へ走っていった。

10分後

宗「……………」

Dクラスにリンチにあい、Fクラスで力つき宗平は、屍になっていた。

浜「宗平。お前の犠牲は、無駄にはしないからな。」

リ「宗ちゃんの方まで私生きるから。」

綾「代表、リンさん。秋葉君まだ生きてます。気絶してるだけです。」

浜「チツ！！そうか、中緑さん教えてくれてありがとう。」

宗「浜也！！てめえ今舌打ちしただろう！！」

浜「皆！！試験召喚戦争の準備だ！！」

Fクラス《おオオオオオオオオ！！》

リ「お〜」

綾「お、お〜（照）」

宗「無視すんな！！お前ら！！」

と宗平を無視していると、一人の生徒が浜也に話かけた。

明「代表、用事」

浜「ん、明桜か？何の用だ。」

明「俺、前線部隊、隊長、任せろ」

浜「分かった。明桜、前線部隊はお前に任せた！！」

明「任せろ。」

そういつて明桜は、自分の席に戻った。

宗「てか、大丈夫か？明桜に前線を任して。」

浜「大丈夫だ。やるときは、やる人間だ。」

と雑談をしていると時間が迫っていた。そして

朝9時〜開戦〜

明桜視点

俺、明桜 幽 Fクラス、一員。今、試験召喚戦争、始まった。

D1「Fクラスの屑どもが相手か。瞬殺して補習室送りにしてやるぜ。試験召喚サモン」

明「試験召喚サモン」

そう言うとDクラスからはDのマークが入ったミニチュアフィギュアの大きさの自分そっくりの召喚獣が出てきた。

Fクラスは、Fのマークが入った同じ物が出てきた。

ただし、装備は、全く違う。

D1の装備は、まるでRPGに出てくる初期装備の勇者の格好と武器器。

対して明桜幽の装備は、忍者の格好に武器は、クナイ二本だ。

これが文月学園が誇るテストの点数が高ければ高いほど力をます試験召喚獣である。

試験召喚獣を使いクラス同士で戦うのを試験召喚戦争という

FからAまでクラスがあり、Aが最高の設備。Fが最低の設備に別れている。試験召喚戦争に勝ったクラスがその負けたクラスと設備交換が出来る。(詳しく知りたい人は、原作を見てください。)

古典フィールド

Fクラス明桜幽VSDクラス山下巧

202V S 9 1

D1「な！？、どうしてFクラスにこんな点数をとれるやつがいるんだ！？」

明「お前、人、舐めすぎ！！」

一閃

明桜の召喚獣がDクラスの召喚獣をクナイで切り裂いた。

Fクラス明桜幽VSDクラス山下巧

202V S 0

西「戦死者は、補習室！！」

D1「補習室に行くのは、や、やだアアア！！」

召喚獣が0になったら戦争が終わるまで補習室に監禁される。

F1「明桜隊長がやってくれたぞ。」

F2「明桜隊長に続け!!」

明「お前ら、必ず、二対一、戦う」

F3「明桜隊長が必ず二対一で戦えとのご指示だ!!」

こうして、Fクラスの士気は、上がっていく。

対してDクラスは、一人やられた上に相手に一人Bクラス並みの点数を持っている人間がいるため。士気は、下がっていく。

そんな中でFクラスがピンチを迎える。

F1「リンさんがやられそうだ!誰か救援に行ってくれ!!」

明「何!!」

古典フィールド

Fクラスリン・フォールフィールドVS木ノ実英介

76VS102

リ「古典は、苦手な科目の一つなの〜忘れたよ てへっ」

英「美人を鉄人の元にするのは、ちょっと気が引けるけど!!」

Fクラス10VSDクラス42

リ「これはちょっとピンチだよ。」

英「これで終わり!!！」

?「それ、させない!!！」

英「何!?!」

英介の召喚獣がリンの召喚獣に止めを刺す瞬間、二人を引き離すようにクナイが飛んできた。

英介は、飛来してきたクナイをバックステップで何とかかわした。

明「ここ、任せる!!！」

リ「うん、任せるよ。私の王子様」

英「くっ!!！」

Fクラス明桜幽VS木ノ実英介  
202VS42

一閃

さっきと同じように明桜の召喚獣は、英介の召喚獣を切り裂いた。

西「戦死者は、補習室!!！」

英「補習室行きか。」



英介は、鉄、ごほんごほん、西村先生に連行された。

明「リン、お前、下がれ、補充、受ける」

リ「うん」

F1「よし！！我が女神を傷付けた罪は、万死に値する。」

F2「Dクラスを皆殺しにしろ！！」

F3「& @ \$ ———」

Fクラスは、捨て身の技：自爆（笑）を使いどんどん道連れにし、

明「隙、あいた、今、中緑」

綾「はい！！」

Dクラスは、前線をズタズタにされ、その隙を突かれて、Fクラスに侵入されてしまい。

そして、

D代表「え、えっと近衛部隊！！」

綾「近衛部隊なら他の人達が足止めをしていますから、来ません。

Fクラス中緑綾子。試獣<sup>サモン</sup>召喚」

D代表「し、試獣<sup>サモン</sup>召喚」

古典フィールド

Fクラス中緑綾子VS Dクラス代表仲島聡

391VS125

中緑の召喚獣がDクラス代表仲島の召喚獣を倒しこの戦争は、Fクラスの勝ちとなった。

第3問「戦争を起こす者達」(後書き)

明桜君が主人公で良いと思う人、手上げて!!

浜「俺が主人公だ!!」

裏1問「主人公？ラジオ」(前書き)

俺は、後悔なんかしてない!!

## 裏1問「主人公？ラジオ」

浜「おいお前ら、この小説の名前を言ってみろ！！」

作「明桜 幽？」

浜「ちがーう！！この俺。夢想 浜也が主人公だろ！！」

作「え！？」

浜「え？」

…

…

…

作「そうだね。浜也が主人公だよ。」

浜「作者！！今、本気で忘れてたよな！！」

作「だって、浜也ってインパクト無いじゃん」

浜「お前が作つといてそれはないんじゃないの！？」

作「でもさ、浜也を活躍させる場面って凄く限られるから。」

浜「え？何で。」

作「……………」

浜「……………」

作「はあ」

浜「何でため息ついた。」

作「お前、試験召喚戦争は、代表が戦死したらそれで終わりなんだから。」

浜「あ！！そうか。ってこのままじゃ明桜に主人公座を奪われる可能性があるって事が！？」

作「いやもう変えようと思ってる。」

浜「ふ・ざ・け・ん・な！！！」

作「大丈夫だ！！だからこのコーナーがある。」

浜「でももし、俺が主人公を下ろされたら、このタイトルは、」

作「元主人公？ラジオになる。」

浜「イヤアアアア！！！」

作「だからそうならないためにこのコーナーがある。このコーナーは、浜也にインパクトをつけるにはどうしたらいいかなどをユーザの方々に送ってもらってそれを題材にして話し合う。」

浜『作者!! なんやかんやで考えてる。』

作「まず一通目。」

浜『何!? もうあるのか!?!』

1 通目 主人公を引き立たせるのは脇役!!

とりあえず、有名なアニメの台詞をパクってみては?

浜『て、お前じゃねえかアアアアア!!』

作「とりあえず、やってみよう。」

浜『……………分かった。』

作「とりあえず、まずはあれから」

浜『じゃあ、いくぞ。……………ペルソナツ!! (どこかのホモ疑惑のある某不良青年風の声。)』

作「次言ってみよう。」

浜『……………ああ。』

浜『絞めんぞ!! キュツと絞めんぞ!! (さっきと同じ不良青年風の声)』

作「よし!! 次ッ!!」

浜『あんたは、俺が討つんだ!! 今日ここで!! (起動戦士の主人公を下ろされたパイロット風の声)』

浜『て、ちよつと待てエエエエエ!!』

作「何!？」

浜『最後の言ったら主人公を完全に下ろされる台詞だろがアアア!!』

作「あ(笑)」

浜『下ろす気満々だ。』

作「浜也が落ち込んだし、今日はここでおしまい。え、お便りは募集してるのか?一応してます。感想の所かそれが嫌なら活動報告の所にも。それじゃ」



裏2問「主人公？ラジオ2」（前書き）

スーパー厨ニフィールド

浜『くそ、何であんなことやっちまたんだ!!』

作「ここから厨ニ要素が出ます。厨ニ要素が駄目という方は、引き返してください。」

浜『タグのエロゲーは、そういう意味もあったのか。』

作「そういう意味もあったんだよ。」

## 裏2問「主人公？ラジオ2」

作「主人公？ラジオ第2回！！！」

浜「くそ、何で本編を進まないでこんなコーナーをやってるんだ。俺達は！？」

作「早速！！コメントが来て、リクエストしてもらったのでやろうと思います。」

浜「ちょっと待て！！もう来たのか？」

作「ああ、もう来たんだ。あと浜也涙目って2回も書かれてたな（笑）。」

浜「知ってるよ！！俺も見たから（涙）。」

作「届いたリクエストは、こちら」

浜「無視か！！」

2通目 勳bさんから

『厨二っぽく喋る』と『ペルソナシリーズ主人公のように必要最低限のセリフしか言わない』

作「これだ！！」

浜「まともなのが届いた！！」



浜『貴様が弱いのではない。俺が強すぎただけだ。』

作「は、ははは、は、腹筋がおかしくなる!!!」

浜『く、邪気眼が疼く。』

作「ちょ、ストップ。」

浜『貴様、余り俺に近づくな。』

作「は?」

浜『俺みたいなたん特異点に関わったら最後組織に追われて、平穏な生活が送れなくなるぜ。』

作「も、もうやめ、」

浜『……………もうやめていい?』

作「もうやめていいよ。」

浜『黒歴史決定だ。』

作「つ、次いつてみよう。」

浜『ああ』

作「浜也?」

浜『どうした?』

作「実は、浜也を主人公から下ろすのが決定した。」

浜『そうか。』

作「え〜と、なにも言わないんですか？浜也さん」

浜『どうでもいい。』

作「……………」

浜『……………」

……………

作「もう止めよう。」

浜『そっけいじのびじでもいい。』

作「もう嫌!!」

続く？

裏2問「主人公？ラジオ2」（後書き）

ヤバい。本編が進まない。

第4問「戦争終結！ーそして」(前書き)

#### 第4問「戦争終結!!そして」

前回のあらすじ〜

浜『七大地獄の誘い（ワールド・ツアー）!!』

浜『止める!!せつかく忘れかけてたのに!?!』

あらすじ終了〜

戦争が終わり、Dクラスには二人の人影があった。

浜『という事で戦争は、うちの勝ちだ!!』

そう言う浜也の顔は、笑顔だった。

対するDクラス代表ね顔は、悔しがってる顔だった。

巧『そんな事言われなくてもわかってるよ!!』

浜『さて、早速、この設備を』

巧『くっ!!』

浜『頂かない』

浜也がそう言ったら、Dクラス代表の顔は、さっきとは、違い驚きに満ちてる顔だった。

そう言う浜也の顔は、さっきとは、変わらない笑顔のままそう言った。



聡「き、君！！言ってる意味が解って言ってるかい！？」

Dクラス代表の言ってる事は、もっともである。

そもそも試験召喚戦争とは、設備交換を目的としてやるものであり、浜也の考えは、今のDクラス代表には到底理解出来なかった。

浜「頼まれて欲しい事があるんだけど。」

Dクラス代表は、これを断る事は、出来ない。断った場合、最低でも3ヶ月あの最低設備で過ごさなければならぬ。だから答えは決まっていた。

聡「分かった。」

受けるしかない。Dクラス代表として設備を守るためクラスの人のために受けるしかなかった。

浜「じゃあ、――――――だ。」

聡「そんな事でいいのかい？」

浜也の頼みが余りにも予想外だったのか、顔に？を浮かべながら聞き返した。

浜「ああ、じゃあ明日の朝までに頼む。」

聡「分かった。それで設備を守れるのなら。」

こうして、Fクラス代表とDクラス代表の話し合いは、終了した。

浜也視点

よし、これで条件は、クリアした。

あとは、明日の朝に試験召喚戦争をAクラスに宣戦布告をするだけだ。

試験召喚戦争は、Dクラスで終わりにしようとしたが、Fクラスのみんなは、俺を信用してやってくれたんだ。出来れば最高の設備を与えたい。

それにやるなら徹底的にやりたいしな。それに常夏コンビ？変態コンビ？変川コンビ？常態コンビ？だっけ？

まあ、いい。あいつらには俺の後輩を馬鹿にした借りがある。

たく、先輩が後輩の足を引っ張ったらだめだろう。

それに後輩がAクラスに挑んだんだ。後輩の無念をはらさしてもらおう。

見てろ。Aクラスこの世は、学力だけじゃないからな！！

さて、帰って勉強しよ。

え、俺が何をDクラスの代表に何を頼んだか？それは明日になれば分かる。

1日後

浜『Dクラス代表。頼んだ物は？』

俺は、朝早くDクラス代表に前の日に頼んだ物を貰いに来た。

聡『ああ、ちゃんとムツツリ商会から買ってきた。』

俺は、Dクラス代表からそれを受け取った。

浜『これだ！！サンキュー！！』

聡『じゃあ、俺は、これで』

浜『ああ、じゃあな』

ふふ、これで揃った。

Aクラス

浜『俺達Fクラスは、Aクラスに宣戦布告する。』

Aクラス全員『な、何だとオオオオオオ！？』

Aクラス全員が叫んだ。

そして、坊主頭の男がこちらに来た。

夏『てめえ、屑のFクラスが何考えてやがる！！』

変態コンビの片割れの夏川変態が話しかけてきた。

浜「夏川、今日は頭にブラジャーを着けてないんだな。」

夏「てめえ表に出るやコラあっ！！てかてめえが何で知ってやがる」  
ははは、何言っでやがる。

浜「ブラジャー頭に着けたまんま学校中を走れば、噂ぐらいにはなる。」

夏「てめえ。ケンカ売ってんのか！！」

浜「そういえば、お前二年の後輩に負けたんだよな。」

夏「あ、あれは、油断しただけで」

浜「油断大敵って言葉知らねえのか。」

そう言ったら、夏川は黙った。

浜「代表をだせ。」

そう言うと奥から綺麗な赤色の髪を腰ぐらいまで伸ばし、目は、綺麗な赤色の目がつり上がりその目は、俺に向いていた。

赤「私が、Aクラス代表の坂本 友子です。」

ふーん、こいつが…ん、坂本？  
まあ、いい。

浜『FクラスはAクラスに対し変則的な試験召喚戦争を挑みに来た。

』

そう言った瞬間、Aクラス全体がざわめき始めた。

友「変則的…？ルールを教えてください。」

浜『教えてって言うなら受けるってこと？』

友「ルールを聞いているだけです。」

チツ！！簡単にはいかないか。

浜『代表同士の一騎打ちといたいどころが、3対3の一騎打ちだ。

』

友「3対3の一騎打ち？。そういうことですか。」

さっすが 頭いい。

友「分かりました。受けましょう。」

夏「だ、代表！？」

浜『分かった。ありがとよ。』

そうやって俺は、Aクラスを出ていった。

まさかあっさり受けるとは。あの写真を使わないで終わったな。

宗平の情報通り代表は、坂本 友子か

まさか二年のFクラス代表元神童の姉か。

次の変則的試験召喚戦争勝てるといいな。

不安になりながらFクラスに向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1574y/>

---

バカと先輩と召喚獣

2011年11月22日04時00分発行